

平成 22 年 9 月 3 日
第 1 分科会事務局

議事録

1. 日 時：平成 22 年 9 月 1 日（水） 13 時 30 分～17 時 00 分
2. 会 議 名：J A 都市農村交流全国協議会 第 1（送出促進）分科会
3. 出 席 者：資料記載
4. 場 所：J A 全中 27 F 会議室

<協議内容>

- (1) 挨拶：J A 全中くらしの活動推進部より
 - ・ 10 月に開催する J A 食農教育推進セミナーの案内をした。
- (2) 事務局説明
 - ・ 他の分科会で採り上げる課題について全中事務局から説明。
続いて、本分科会で採り上げる課題 4 つのうちの 2 つの事例を紹介しながら課題解決のための討議を行った。
- (3) **課題 2 「食農教育に関する機会提供のための仕組みづくり」**
 - 事例「J A あつぎ夏休み収穫体験ツアー」について事例を紹介し、課題の解決について討議を行った。
 - ・（都市部域富裕層の）子どもさんは習い事が多く忙しい。どこかに行って農業体験（食農教育）をするというのは、単にイベントに終わってしまう可能性がある。J T B のツアーに組み入れた体験と J A 食農教育活動が同じによいにも見える。関心度が低いのが実際のところ。イベントで終わらせずどうやっていくかが課題だ。（都市部 J A）
 - ・ 子ども村をイベントとする見方よりも、仕組みの作り方が大切だ。渉外者が添乗に行くというこの事例は、J A の直接的なメリットの他に、2 次的なメリットがでてくる。その仕組みづくりによっては、J A の幅広い事業に広がってくるだろう。（中央会）
 - ・ それと別の切り口として、新人職員教育にしている例も多い。（全中）
 - ・ 合併する以前は子ども村に取組んでおり、3 年目は抽選するくらいであったが、やがて職員の負担が大きくなり止めてしまった。（都市部 J A）
 - ・ 子ども村が縮小してきた要因は、組織の縦割化の弊害で J A ・ 職員の意識に現実と理想のギャップ、J A リスクやモンスターペアレント等複合的な要素もあったのではないか。（全国機関）
 - ・ しかし、青年部や女性部と同じように子ども未来部会にあってもいい発展性のある話ではないか。（アドバイザー）
 - ・ 泊りで実施するリスクや添乗職員の負担も大きいので、簡単に管内での農

業体験の方がいいと思うが、それはイベントになってしまい、次に繋がっていかない。(中央会)

- ・ 信用事業にもリンクした事でもあるが、J Aバンクとして統一的な推進方策は無く、各J Aで工夫している。J Aあつぎの例のような渉外者が勧めるのはいいアイデアではないか。(全国機関)
- ・ 事業の接点の多い人ほど、J Aを身近に感じる。(アドバイザー)
- ・ 当J Aは受入れだが、この事例を聞きながら当J Aではどんな組み立てができるのか考えてみた。お祭り騒ぎではなく次の事業に繋げるやり方をしないと。当課(地域振興課)には収益事業は無く、費用を使うばかりだ。多少の顔繋ぎ程度に留まれば、J Aには何も生まれず意味の無いことだ。当J Aも送出しはやるが、どんなことをすれば地域に喜ばれ、お父さんお母さんとの接点づくりに繋がるヒントはないか考えている。でも、やればやるほど職員は大変になることが事実だ。職員の負担といえば農協観光や日生協とも連携しているが、担当者は時期が来れば休み無しで、少し手を抜かなければやっていられないなあと、そんな事を思わざるを得ないこともある。(受入J A)
- ・ そんな現実もあるが、それだけ関心もあり要望もある。(アドバイザー)

(4) **課題1「J Aグループ外との連携」**

○事例「J A福岡中央会と福岡女子大学の連携による都市農村交流について」について事例を紹介し、課題の解決について討議を行った。

- ・ 都市部J Aが教育機関との連携には、江戸東京野菜の復活に向けて学校と取組んだ事例がある。学校からはJ Aを知るきっかけになった。(全国機関)
- ・ 中央会のOBの方が 綱町小学校の事例 寺島茄子の加工品など、学校と組んでやっている例。また都内でも地元の食材を研究で、小松菜を学校給食に供給する例。女子栄養大学と連携事例がある。(中央会)
- ・ 類似事例として、山形大学にエリアキャンパスがある。NPOの支援で最上地区8市町村においての様々な講座が単位制となって開かれている。それは過疎地域での都市農村交流が中心で、「森林資源」、「地域再生活動」、「幸齢者集団に学ぶ」等の多数の講座がある。また、地域の子供たちが、大学のキャンパスに学ぶ交流もある。こうして大学教授等の知識人には都市農村交流を認識が広がっているのである。(アドバイザー)
- ・ 現在、協議会賛助会員として、東京農業大学がある。この交流への大学の目的は、インターンシップの受け入れ地区を広めたいこともあるだろう。また、中央会の事例もある。ある中央会では、食農教育の指導者育成ために教育大学との連携。ある国立大学がJ Aと連携で地域振興を取り上げている。教育機関に協議会が仲介して、地域のJ Aを紹介することも検討を考えている。(全中)

- ・ 中央会としては教育機関とは当然連携しかなければならない。学童農園の支援事業は毎年十数校に登り、学校側、先生方に大変喜ばれている。しかし、欠点としては中央会が直にやっているとJAが不在となってしまうことに留意している。(中央会)
- ・ 当JAでは、市内へ大学農学部が移転したら、ファーマーズマーケットがタイアップできないかとの構想がある。今後が楽しみだ。さらに市内保育会の給食の先生に対する農業についての講習会の出前授業もある。それが、先生から非農家の子ども達に農業の大切さがうまく伝わっていけばいい。これは保育園からの要請なので、やがて、幼稚園から学校関係、多方面と発展していくだろう。しかし、単位JAでは持ちきれない部分がある。(都市部JA)
- ・ 都会の方には農村のイメージがしづらい。そのなかでファーマーズマーケットはイメージし易い、さらに実感や体験に。ファーマーズマーケットは都会における武器になるのではないか。(アドバイザー)

○事例「サッポロビールとJAほくさい連携した都市農村交流」について事例を紹介し、課題の解決について討議を行った。

- ・ 企業との連携では中間支援的な役割が必要だ。企業の食と農へのニーズは高い。その役割をこの分科会で課題として作り上げていくことが必要ではないか。直接JAとの連携は、難しいのでそこにマッチングをする仕組みが求められる。(全中)
- ・ 融資という機会は、JAよりも信連や農中の方が多いのではないか。ある県信連では融資先企業経営者による会合があり、そこでも地域貢献をしたいとのニーズがあった。そこには中央会が働きかけるべきだろう。(全国機関)
- ・ 食品産業はこの関心が高い、例えばファミレスでも社員教育としての農業体験のニーズは高く、企業との連携ではJAグループとして中間支援を果さなければ、JA不在となってしまうだろう。それが協議会の目的の一つだ。(全国機関)
- ・ 私の経験上10年前は企業との連携できなかった。でも3年前から動いた山梨のNPOは動きが早かった。行政とも積極的に連携した。それをJAが役割を果たすことができれば、JAが旗振り役として企業にもイメージしやすい。(アドバイザー)
- ・ 地元企業との連携では、昨年からガス会社と料理教室の連携と農業体験、ファーマーズマーケットで買い物、地元新聞の新聞一面での広報で効果があった。これは地元新聞の働きかけで始まった。このガス会社の活動はこれから市内のみならず、県外へも飛び火する可能性があるらしい。(都市部JA)
- ・ 新聞社やメディアとの連携は効果が大きい。(全中)

- ・ 食や農への関心は高まっている。新聞社はこのトレンドを社会面で追っている。いい話題であれば、この動きは他でも採り上げられ、他誌でも採り上げられる可能性がある。(アドバイザー)
- ・ 市内のある地区では地元の遊園地との連携事例がある。栄養士の指導で、小学生対象に豆腐づくりを日本一の町会と連携して行った。(都市部 J A)
- ・ 農村部からみて、都市部 J A のマーケットは広いことがうらやましい。ここからの受入れできることを期待したい。そのためには何でもしたい。(受入 J A)
- ・ 都市部 J A は地域と接点が薄い。J A 同士のネットワークで都市部 J A も役割を果たせれば、お互いに W I N - W I N の関係が作れるのではないか。たとえば、二地域居住は田舎暮らしよりニーズが高くなっている。2007年問題にかわる2012年は8兆円産業になるという。これを J A 同士でやれば、事業となる可能性もあると考える。また、援農のジャンルでは、単にボランティアでなく、シルバー人材センターとの中間支援役を担い、多少の報酬をもらっての滞在型交流ができないと考える。(アドバイザー)

(5) その他

- ・ 月刊 J A の「くらしの活動の推進」の記事 (P 2 8) についての紹介をした。

以上